TDA JAPAN
8号　Vol.8-春
2010-03-01

景観文化

インフォーラム

レンタ川にかかる橋（Ponte Vecchio）

この橋はイタリア北部、食後酒「グラッパ」ゆかりの街、バサーノ・デル・グラッパという街にあります。

建築家、アンドレア・パラッディオ（1508～1580）が59才の時に設計した木造の屋根付橋です。石畳で舗装され、全長はおよそ30メートルぐらいでしょうか。嘗ては馬車ぐらいは通っていたと思われますが、今は新しい橋が別の場所にあり、人だけが渡る橋です。橋詰めにあるグラッパ・バーを中心に多くの市民や観光客の憩いの場として、平日でも人々の談笑が絶えない所です。しかしこの橋の興味深い点は別にあります。それは様々な理由で橋が倒壊する度に、以前と同じように掛け替えられているという事です。新しい橋があるので、機能的意味では、立て替える必要はない筈です。

そんな中、他の街で細い道を信号による時間差一方通行で、道路拡幅をせず街の景観を維持しつつ、車に対応している光景をみました。「物を機能だけでとらえず、景観要素と考え、たとえ機能の一部が時代にそぐわなくても使い方のほうを考える」という考え方によるところが多分にあると思ったわけです。繰り返される橋の再建は、この考え方を別の形で表現しているものではないでしょうか。観光立国を目指す日本が、世界遺産がもっとも多い国、イタリアに学ぶとすれば、このような考え方ではないかと思った次第です。もっともそれには、残すに足りる風景を見極める力が私達になければいけない事はいうまでもありません。

ＴＤＡ理事　井上　洋司

VOL.8-目次

□表　紙
インフォーラム（絵・文）／井上　洋司
□見　開
TDA テーマリリース
TDA 連続「景観講座」～ 2009 年度景観講座～下半期概要／工藤　安代
□見　開
海外ランドスケープ事情／小林　正美
『パリの景観行政と APUR（パリ都市計画アトリエ）の役割』
□裏表紙
情報告知欄『景観利益』／安倍　貞司
□裏表紙
TDA コミュニティ／八木　健一
□裏表紙
景観ビジネス最前線（㈱アーテック）
□別　冊
景観コラム
『ナウリコット村再生プロジェクト』
報告第２弾／高橋　徹

情報告知欄『景観利益』　景観文化Q&A

ＴＤＡ理事　安倍　貞司

Q 最近よく耳にする「景観利益」とは？

宮崎駿のアニメ映画「崖の上のポニョ」の舞台は守られるのか、2009年10月１日の新聞各紙は「景観利益」「景観は国民の財産」「景観の公益性」といった見出しで、万葉集に詠まれた景勝地（広島県福山市）の埋め立て事業に対する広島地裁の判決を記事にしていた。

今回の判決の主な内容は、

① 鞆の景観は美しいだけでなく、歴史的、文化的価値があり国民の財産である。事業の完成後に景観を復元することは不可能で周辺地域の人が享受する「景観利益」は法律上、保護に値する。

② 事業者が主張する事業（埋め立て、架橋）の必要性、公共性は認められるものの、その根拠となる調査、検討が不十分で、合理性に欠け、裁量権の範囲を超えている。公有水面の埋め立て免許が交付されれば「景観利益」に重大な損害を生じる恐れがあり、景観保全を犠牲にしての必要性について疑問があるとしている。

また、各紙の論旨やその識者の解説から「景観利益」を整理すると、良い景観を楽しむ住民の利益、貴重な景観の美しさを享受する利益といえる。「景観利益」の重要性を公共事業の必要性より重く見た初めての司法判断であろう。

Q 近年の景観保護の流れはどのようなものか？

これまでは、景観を損ねる要因として上がるのは、高層ビルや建物の奇抜なデザイン、屋外広告がほとんどで、公共事業はまれであった。行政訴訟は訴えを起こせる人の範囲が狭かった一方で行政の裁量権が幅広く認められ「裁量権の逸脱とまではいえない」と、退けられることが多かった。05年に「行政事件訴訟法」が改正され、市民の行政への異議申し立て、事前差し止めの訴えのハードルが低くなったと言える。

その後、景観保護の流れを加速させたのは、06年の国立市の最高裁判決で「景観の良い所の近くに住んで日常的にその恵みを享受している人は景観侵害に密接な利害関係を持つと認め、景観を享受する利益（景観利益）は法的保護に値する」とした（※ただし、個人の権利のような明確にものではないとしている）。

05年には景観を「国民共通の財産」と位置づけた景観法が施行され、全国の自治体でも次々と景観条例を制定した。近年は、自然景観や歴史的景観。都市景観を貴重なもの、保護への関心が高まり、社会的に定着してきた。景観の価値を客観的に具体的指標で判断することは容易ではない、景観利益と事業とのバランスを保つ役割は裁判所ではなく、本来は、地元自治体が住民とのこまやかな対話から妥当性を検討することが求められてくる。

ＴＤＡコミュニティ

NPOというのは周知のように収益を目的にしない法人ということなので、営業活動を活発にして仕事を発掘するということはありませんが、毎年の総会で決算と予算が承認され、それに準じた活動をしなければなりません。会員は一般的な会社でいうと社員に当たりますが、給料を受け取るのではなく、逆に入会金や年会費を支払って参画しています。

そこで、最も重要な点はその活動目的にあります。各会員は、一般企業の社員のようにその企業の利益のために働くのではなく、ある種の自己目的がこのNPO活動を通して実現されなければ参加する意味がないことになります。

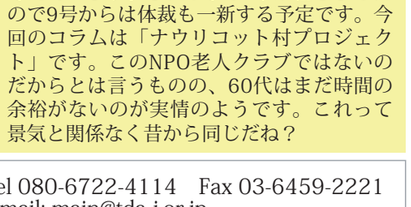
代表理事をはじめとする理事会が毎年の活動内容と予算を検討していますが、会員各位からの積極的な提案や活動への参画が望まれています。年会費を無駄にしないためにも、ご遠慮なくどんどんご意見をお寄せください。

事務局長／八木　健一

景観ビジネス最前線

高耐候サインパネル
サインフレーム
EBAS
Electron Beam Artec System
アーテックは高耐候性サインパネルを中心にサイン全般を取り扱っております。
ロングライフという視点から環境に貢献できる製品を提案します。

1 優れた耐候性(耐色あせ)・耐久性
ロングライフを支えるＥＢコーティング



2 いたずらに強い
油性マジック・スプレーの悪戯やタバコ熱に負けない

中性洗剤または洗浄用溶剤（ラッカーシンナーやベンジン）で白濁せず簡単に洗浄可能です。

※スプレー拭取り試験(ラッカーシンナー使用)

タバコの揉み消しや押付け程度の熱で表層が炭化することはありません。

※耐シガレット性試験(JIS K-6902)

artec
株式会社 アーテック 東京営業所
〒170-0013東京都豊島区東池袋1-47-3
17山京ビル704
TEL 03-3985-0095　FAX 03-3985-0096
http://www.e-artec.co.jp

編集後記

新代表になって新しい年度の「景観講座」の企画や、この「景観文化」の打ち合せが始まっています。さきの7号では試行的に差し込みのペーパーをお届けしましたが、これを「景観コラム」として定着させようと考えています。また8号で2年が経ちましたので9号からは体裁も一新する予定です。今回のコラムは「ナウリコット村プロジェクト」です。このNPO老人クラブではないのだからとは言うものの、60代はまだ時間の余裕がないのが実情のようです。これって景気と関係なく昔から同じだね？

NPO法人 景観デザイン支援機構　事務局
〒151-0051　東京都渋谷区千駄ヶ谷3-28-8-302
Tel 080-6722-4114　Fax 03-6459-2221
e-mail: main@tda-j.or.jp
URL: http://www.tda-j.or.jp

［デザイン：㈱アーバンプランニングネットワーク］201003500

TDA連続「景観講座」

～2009年度景観講座～下半期概要

ＴＤＡ理事　工藤　安代

2009年度、計８講の景観講座も昨年12月をもって無事に終了した。上半期では、色彩や照明デザインに関する講座が中心に進められ、下半期は都市サインやストリートファニチャー、景観資材、パブリックアート等、幅広いテーマを扱った講座が開催された。

●第5講　『パブリック・サイン論』

講師　中村　豊四郎（インダストリアル・デザイナー／アール・イー・アイ㈱代表取締役）

プロダクトからサイン計画まで多様な分野で活躍されている中村講師による第5講では、“公共サインとはないか”という導入説明から、サインの機能やデザイン手法等に関する“サインの要素”の概論について説明がなされた。

後半では、「地下鉄サイン」や「街なかのサイン」「大規模再開発サイン」等について豊富な事例写真を取りまぜながら、今日のパブリック・サインとはいかなるものであるかについて、具体的な内容を指し示していった。公共空間における多種多様なサインを美しくデザインし、秩序だった景観をつくっていく手法について幅広い聴講者の理解を深める貴重な議論となった。

●第６講　『街の道具論―都市デザインにおける道具の役割』

講師　宮沢　功（環境デザイナー）

宮沢講師の講義では、使い手の視点に重きを置くストリートファニチャーのあり方やデザイン理念が語られた。

まず環境デザインの役割を説明し、「都市をわかりやすくつくること」「地域性をつくること」「時間・空間のドラマをつくること」という“都市デザインの三つの視点”について指摘がなされた。

さらに環境を構成する諸要素を示し、物理的要素と感性的要素について詳しく説明がなされていった。

次に、本題となる“街の道具”と都市デザインの関係について、ストリートファニチャーの機能と役割、屋外広告物についての詳細な分析等、宮沢講師の長年の実践を踏まえた“街の道具”の思想が沁み渡った聞きごたえのある講座となった。

●第７講　『実務の中の素材』

講師　勝田　幸仁朗（物林㈱　環境・景観事業部企画開発室）
宮林　正幸（ティー・イー・コンサルティング所長）
鈴木　稔（㈱住軽日軽エンジニアリング 商品開発グループ長）
金山　典夫（サントリーミドリエ㈱代表取締役社長）

勝田講師

宮林講師

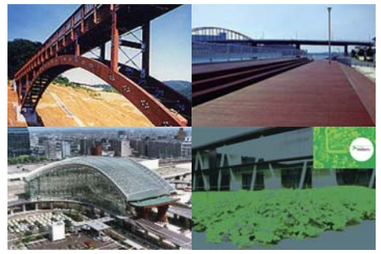
鈴木講師

金山講師

木材、アルミニウム、緑化材という景観デザイン素材に関する実務者が講師を務めるという本年講座中最もユニークな講となった。

まずは勝田講師が講座概要をパワーポイントをまじえ限られた時間の中で鮮やかにプレゼンテーションしていった。

続いて景観用木材のエキスパートである宮林講師により、木材の材質面の特徴、腐朽菌や虫害，気象による影響などについて詳しい講義がなされた。



次に、アルミ材の専門者である鈴木講師に変わり、アルミニウムとの歴史や特徴について説明がなされ、製造工程や合金の種類など専門的な情報が提示された。アルミ素材を使った景観デザイン事例写真も数多く用意された。

トリを務めた金山講師からは、近年話題が集まっている環境緑化システムについて、自社の独自開発製品「パフカル」を中心として説明がなされた。緑化による断熱効果とCO2の削減効果について言及がなされ、緑による色彩的な景観美化だけでなく、環境への総合的な配慮が重要である点を具体的な写真事例の紹介と共に語られた講義となった。

●第8講　『都市空間におけるアート実践』

講師　工藤　安代（NPO法人アート＆ソサイエティ研究センター代表）

国内だけでなく世界各地で行なわれている都市の中でのさまざまなアートの実践について話がなされた。初めにパブリックアートの1960年代から現在までの歴史的変化の概要を説明し、今日の多様な実践を包括的に理解する基礎情報が伝えられた。さらに都市環境・社会環境・自然環境との関わりの中でどういった実践がなされてきているか具体的な写真事例を紹介しつつ説明がなされた。

昨今注目が集まっているクリエイティブ・シティ論を踏まえた都市とアートの役割や、コミュニティ再編への取り組み、さらにエコロジーとアート活動の最近の動向等を紹介し，アートが現代社会の課題に創造的な解決法の糸口を提供しているという総括がなされた。

海外 ランドスケープ事情　『パリの景観行政とAPUR（パリ都市計画アトリエ）の役割』

ＴＤＡ理事　小林　正美

フランスの都市計画では様々な制度改革を経た後、各市町村が決定する「地域開発計画：PLU」（Plan Local D'Urbanisme）を1999年に制定し、建物の保存、街並みのルール、交通、景観などについて、より民主的な方法で具体的な空間像を定めていく総合的な制度を確立した。特にパリ市は近年全20区のPLUを全面的に制定したばかりであるが、熱心な市民との話合いを通して伝統（Patrimoine）を如何に守るかという議論を行ったと言われる。日本の地区計画とは違って、最終的な空間像を協議型で決めているところが注目に値する。実際の計画をまとめる作業をAPUR（パリ市都市計画アトリエ）という市の外部組織が担当したが、筆者は2007年にこの組織で研修し、実際のプロジェクトに携わる機会を得た。（図１）はPLUの一例、（写真１）は実際の住民説明会の様子である。

図１　フランスPLU

写真１　住民集会

私がAPURで担当した「ベルシー・シャラントンプロジェクト」は、パリ東南に位置し、最近サンテミリオンという銘柄のワイン貯蔵所を再生した再開発で有名になったベルシー地区と隣接自治体シャラントン市とにまたがった約36haという広大な空間における再開発計画であった。具体的には、パリの周縁部を走る高速道路とクロスする国有鉄道（SNCF）用地の上に人工地盤を構築し、商業・業務・集合住宅の混合型街区を形成するというものである。計画案として、コルビュジェ型タワー案、低層街区型のカルチェ案、田園都市型案の３案を検討したが、最終的には既存の街区との連続性が高いカルチェ案で進める方針となった。かつてのボストンのように、行政内部にインハウスの計画部隊がおり、実際の設計を行うという、わくわくするような貴重な体験をさせてもらうことができた。（写真２）は敷地の航空写真、（写真３）はカルチェ案の模型写真である。

写真２　航空写真

写真３　カルチェ案

■建物再建など開発コンセプトを考えてください

会員の方、一般の方々、できるだけ多くの方々に開発コンセプトを考え、ご提案して頂きたいと思います。どのようなテーマでも、また提案の表現は自由です。ナウリコット村の良さや潜在力を引き出す発想の手がかりとして次のようなキーワードにもご留意ください。ご提案、ご意見はホームページからお願いします。

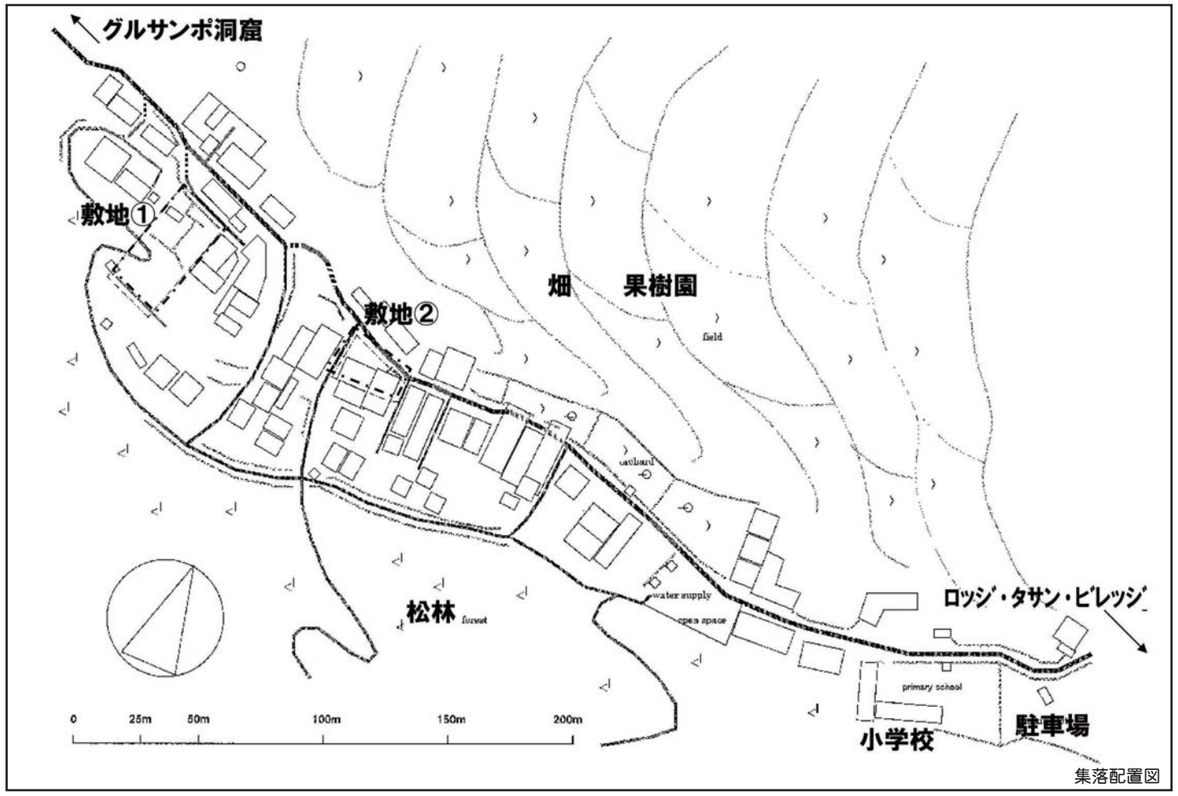
- 8,000m雪山ふもとの里山
- 石造りの街並み・建築景観
- エコ・ビレッジ、エコ・ツーリズム
- チベット仏教、巡礼、瞑想の里
- 民族・部族のアイデンティティと多様な人々の交流
- 衛生的な生活を望む村人

■今後の進め方

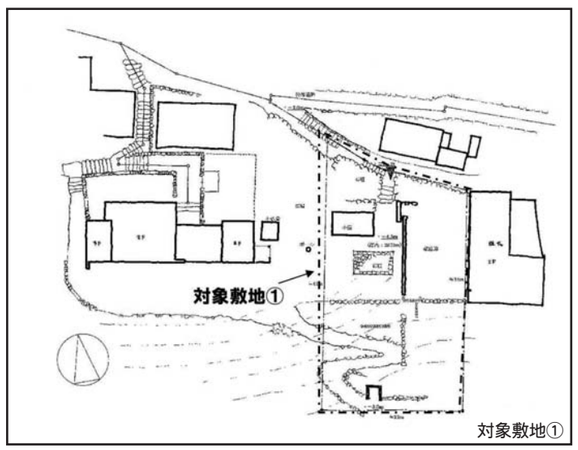
本計画は、「村の崩壊を食い止める総合的な村再生プロジェクト」なので、「廃屋再生」というハードだけでなく、「有機農業」や「村民民宿」というソフト分野で協働いただける専門家を求めています。

建物再建について、地域の自然、歴史、文化を踏まえた開発コンセプトを構築します。そのために、地域の文化、住まい方、工事等についての基礎的な調査を、本年５月～６月に行なう予定ですので、ご協力いただける方の参加を募集します。

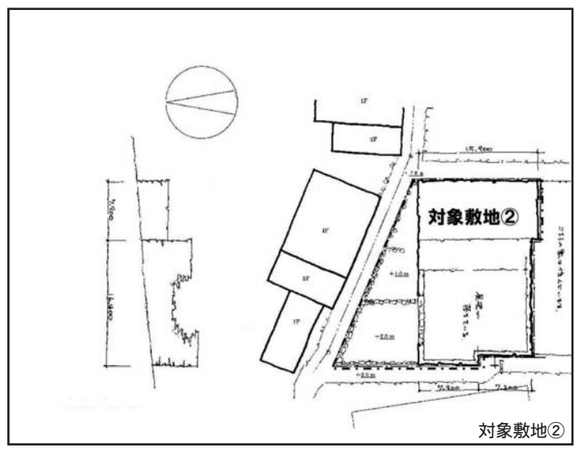
プロジェクト実施の諸条件を整えて、順調に行けば本年11月頃、JICA草の根技術協力事業（草の根支援型）に申請する予定です。



集落配置図



対象敷地①



対象敷地②

景観コラム
『ナウリコット村再生プロジェクト』 報告第２弾

ＴＤＡ副代表理事　高橋　徹

世界の秘境、ヒマラヤ山奥の村で今日起きている問題は先進国と共通です。村では、若者が都会に流出して高齢化、過疎化が進み、道路が出来ると、外部からの開発インパクトは村の共同体として昔ながらのコミュニティや景観を壊します。また、経済開発が進むインドやバングラディッシュからのスモッグが流入し、モンスーンの雲は遥か遠くの日本と繋るという、地球的な環境問題を実感させます。たまたま、か細い縁で始まったプロジェクトですが、この小さな村の再生計画は、環境と開発のあり方を考える世界共通、かつ身近な問題でもあります。

本プロジェクトの目的、概要は、本会のホームページや機関紙「景観文化」昨年９月の第５号に紹介しています。昨年４月に引続いて11月に第２回現地調査を行ないました。今回は、プロジェクトの報告に加えて、周辺地域の文化や見所を紹介します。

■ヒマラヤのクロスポイント、ナウリコット村

ネパールの中西部、ダウラギリ峰（8,176ｍ）とアンナプルナ峰（8,091ｍ）のヒマラヤ主稜線を南北に切り分けるカリ・ガンダキ川左岸の扇状地が隆起した丘の上、2,650ｍの標高にあります。この流域は、下流はガンジス川につながり、上流にはヒンズー教と仏教の聖地ムクチナートにつながる巡礼路です。また、昔からチベットとインドを結ぶ交易路（塩の道）でもあり、周辺は交易商人として潤ったタカリー族の本拠地です。気候風土としては、ヒマラヤの8,000m峰を結ぶ線が乾燥荒涼気候のチベットと、亜熱帯気候の地域とを区分するところで、丁度、この村はチベットへの入り口に当たります。

■周辺地域の文化と見所

●石屋平頭の建物と村景観

雨が少ないため、伝統的な家の形式は石積みの構造で、木材の梁の上に土を乗せた平屋根が特徴です。２階建ての家が多く、１階は家畜小屋や倉庫、２階が居住空間です。隣家とは近接ないし壁を共有し、平らな屋根の上は農作業場でもあり、交流の場にもなります。また、貴重な木材を使った木彫窓が魅力的です。多くの農家はりんごを栽培し、４月はりんごの花盛りの中、雪山の美しいパノラマが見られます。

マルファ村鳥瞰

平屋の家並み

●点在する宗教遺跡、ゴンパ（小寺院）

周辺の村々にはチベット仏教の各宗派の寺（ゴンパ）散在しており、古いものは15世紀末建立です。村はずれの崖には、昔、仏教僧が瞑想のため居住した洞窟廃墟があります。また、この地に祖先を持つタカリーは亡くなるとナウリコット村にKhimiという墓を立て、頭頂骨を納めるという独特の風習を持ちます。

●先祖礼拝とチベット仏教が入り混じる祭り・イベント

一年をとおして幾つかの祭りが行われます。３月の祭りはタカリー族の新年の祭りとして弓、先祖礼拝、歌や踊りが行われます。８月から11月は、各寺院のお祭りで仮面ダンスなどが行なわれます。12年毎にはLha　Phewa（神の出現）という大祭があり、タカリーの4つの祖先の記録を語り継ぐまつりで、次の大祭は2017年に行われます。

●村歩きと、周辺トレッキング

○タサンと呼ばれるこの地域はタカリー族が一番古く住みついたところで、これらの村々を探索します。その中でサウル村はカリ・ガンダキ川対岸、歩いて30分。ニンマ派の寺があり、歓喜仏などの興味深い壁画があります。立派なりんご畑や魚の養殖池も見られます。

○ヌプサン　カルカ：　約２時間の所にあるヤクの放牧場。3,000ｍの高地にあり、ダウラギリやツクチェピーク、ニルギリ、アンナプルナ山群の素晴らしい展望が出来ます。3月～4月は石楠花の花、草を食むヤクの群れが見れ、ヤクの血を飲む儀式が4月末に行われます。

○グルサンポ洞窟：　3,000年前からの聖地で、下の村から約３時間ダウラギリの中腹にあります。昔はここがネパールとチベットの境界とされていました。８世紀にインド人高僧パドマサンババがこの地で瞑想したとして、今でも仏教徒の巡礼者が訪れ、ナウリコット村は巡礼者を迎える村でした。

○ダウラギリ　アイスフォール：　ダウラギリ頂上直下から落ちる氷河の下端に至る片道約４、５時間のトレッキングです。8,000m高峰群ピークを見上げる眺望と下の村々の鳥瞰が楽しめます。また、じゃこう鹿やヤクの群れが6月から10月まで見られます。

○セコン池、ブチャーチョ池：　下の村から徒歩約１時間30分です。セコン池へはダウラギリ・アイスフォールの途上、ブチャーチョ池は深い松の樹林の中にあります。ひでりの時にはこの池で雨乞いの儀式が行われ、二つの池ともに、バードウォチングやニルギリ、ダウラギリ、ツクチェピークの素晴らしい展望が見られます。

●ロッジ・タサン・ビレッジ

タサン地域の中心、ツクチェ村出身でカトマンズにサンセット・ビュー・ホテルのオーナーが５年前にナウリコット村入口に建てたリゾート風ロッジ。山の眺望とタカリー文化の伝統的ライフスタイルを重視したサービスを提供しています。我々のプロジェクトの現地拠点

でもあります。

ダウラギリ氷河

カリ・ガンダキからの眺望

■道路整備にみる、中国とインドからの深刻な影響

この地域では中国とインドからの援助競争が激しくなっています。主に中国は道路整備、インドは学校など施設建設でこの地域への影響力強化を計っています。このカリ・ガンダキ川流域は有史以来、内陸モンゴル、チベットとインド洋を結ぶ数すくないの交易路として発展してきた地域です。20世紀初頭にはインドを支配するイギリスと南下政策を進めたロシアがぶつかり合い、地政学的に大変デリケートな地域でした。両国は今、経済新興国して急速に発展し、今世紀後半には世界を動かす経済大国にもなろうとしていますが、100年経った今、両国に挟まれた小国ネパールは、かってと同じような問題に直面しています。両国の物流は、現在、東部のカトマンズ―ラサ間を結ぶ道路のみに頼っていますが、このルートは極めて急峻な斜面で、雨季の豪雨による災害危険地帯です。一方、カリ・ガンダキ川ルートは気候的、地形的にもはるかに有利な条件を持ち、将来的には国際物流ルートになる可能性があります。さらに、成都―ラサ間で開通したチベット鉄道は、インド延伸の可能性があり、そのルートになるという憶測もあります。将来、この地域が今とは全く違った環境に置かれることへの備えとして、何をなすべきなのか、余りにも大きな課題です。

■第２回現地調査の結果から

１）村民との対話集会を開催しました

2009年11月18日、小学校校庭で、村長以下、全参加（約40名）で対話集会を開催しました。お昼のスナックもでて約２時間の熱心な議論の後、次の４項目を確認し、村民出席者全員で署名しました。

①今後、この村では伝統的な建て方を守り、自らも住むこと。
②崩壊した家の再建にあたり、そのデザインは今後、検討すること。
③村活性化の資金については、日本側でも今後、検討すること。
④このプロジェクトで得られた利益については、村共同で使うこと。

村民集会

村民集会

２）エコ・ビレッジの事例を視察しました

地域の人々の生活の基盤の第一は農業です。有機農業で、安全で美味しい野菜や穀物をつくり、地産地消的に地元の民宿等で使うことを考えています。目標とすべきは、持続可能な未来社会の一つの方向なるヒマラヤの山奥ならではのエコ・ビレッジづくりでもあります。ポカラ近郊での参考事例を視察しました。

●有機農業リゾート「はなのいえ」

ポカラ近郊、標高1,500mのアスタム村に、日本の旅行社の経営ですが従業員は皆ネパール人で周りの村と良く馴染んでいます。約３haの農場に野菜や果樹、牛飼育、養蜂などパーマカルチャー式有機農法が展開され、参加・体験的な活動ができます。ロッジは５棟、10室で、石造りの建築でありながら内部は土壁にするなど自然素材に包まれた空間です。料理は農場で取れた野菜での和食というのが特徴で、農場の収穫物はポカラにある同社経営のホテルとレストランに卸されます。

●高級エコ・ツーリズム「タイガーマウンテン　ポカラ・ロッジ」

世界的なエコ・ツーリズムの先駆団体の経営で、西はダウラギリから東はマナスルまで見える絶景の地にある高級リゾート。斜面に建つ19戸のコテージが客室でソーラーシステムを備えています。客は欧米系しかおらず、周辺との隔絶感はありますが、周辺の村を歩くネイチャーウォークなどレベルが高い活動ができます。

●一石二鳥のバイオガス発生装置

最近、海外からの支援もあって牛糞などからバイオガスを発生させる装置が普及されつつあります。農家単位の牛2、3頭で賄う小規模なものも可能で、残渣は肥料にもなり、森林伐採抑制の効果もあることから循環型、有機農業の展開に役立ちます。ヒンズー経の関係から人糞を入れることは抵抗があるようですが実際には混合させて効率アップをしているようです。都市用の下水道システムではなく、農村ならではの汚水処理システムとして大いに参考になります。

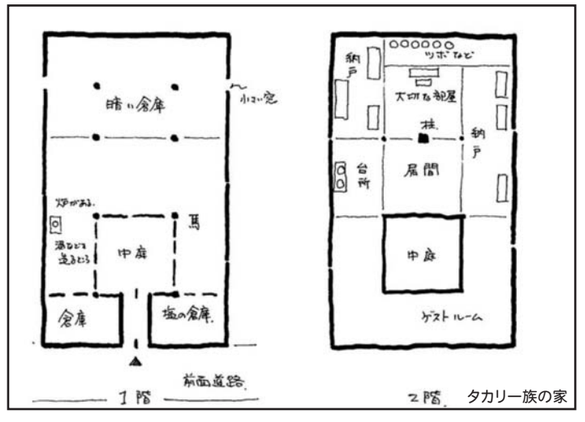
はなのいえ

バイオガス発生装置

３）タカリー族豪商の家

塩交易を独占したタカリー商人の家は大きくて立派です。ツクチェ村の街道に面する豪商の家を見ると、道路側に塩などを貯蔵する倉庫が置かれ、その奥に美しく手入れされた中庭を囲む2階建てです。

中庭に面して馬小屋、倉庫、酒などをつくる作業場などがあります。２階が居住スペースになっており、大きな居間スペースの



タカリー族の家

ほぼ真ん中にある大黒柱によってさらにスペースが区切られます。正面は最も大切な部屋で、先祖礼拝や儀礼用の竈が置かれ、壁の棚にはきれいに磨かれた真鍮製の器などが飾れます。この部屋を中心に壁沿いに座る場所が設けられ、背の低い座卓も幾つか置かれます。居間の横に台所があり、日常は食堂にもなっているようです。中庭を挟む道路側の部屋は客用。屋上はフラットで、冬季中の食料とするため、収穫した穀物や野菜を乾燥させる作業場として使われます。燃料となる薪も屋上縁に置かれ、薪の太さや量がその家のステータスにもなります。隣家は極めて近接して建てられるので、屋上同士でも往来ができます。

タカリー住宅の内部

道路実測中

４）集落と再建対象敷地の実測調査

前回４月の調査で、おおよその村の土地利用や骨格がつかめたので、今回は集落全体の家屋配置図をつくることを試みました。本格的な測量ではなく、村を東西に縦貫する道の屈折点間毎の距離を測りました。結果は、東端の小学校から西端の家屋まで約500mで、建物の家形（目測）を入れた配置図を1／1,000の縮尺で作成しました。巻尺を使った実測では幼児や子牛までわらわらと集まり、村の子供の協力は大いに役立ちました。

■集落の概況

村の入り口には低学年用の小学校があります。この道が村を貫通するメインルートで、西北西方向、ダウラギリ頂上を前方左に見ながら進ます。道は、カーブや階段がある緩い登り道で、幅は1m～2.5mとまちまちですが、版石で舗装されています。建物の壁は道端から直接立ち上がり、ほとんど側溝は作られていないので洗濯、炊事などの排水は道の上に垂れ流されています。建物内で家畜を飼うため、昼間は放牧している牛たちも道を往来するので、その糞がよく転がっています。建物は地形の高低に合わせて密集して建てられるので、建物を貫通する道もあります。石造りの外観もあって、南欧の山岳都市を思わせるアーバンな感じがする景観です。村を抜けると、畑や牧草地が広がり雪山のパノラマに囲まれます。その先、道は松林の中に入り、山の中腹からパイプで引いた水をためる水槽や、粉を挽く水車小屋などが現れ、その先、草地の広場にはグルサンポ洞窟に向かう巡礼者のための宿泊小屋が現れます。ここから先はダウラギリ氷河から落ちる大きな谷に遮られ、谷越えの完全な山道になりますが、8,000mのダウラギリ峰を下から上まで遮るもの無く見ることができる絶景のポイントです。

現在、カリ・ガンダキ川沿いにあるコバン村から丘の上のナウリコット村まで、車道が出来ています。急な斜面を荒造成したばかりですので色々安全上の問題がありますが、小学校の手前に終点となる車回しが出来ています。

■再建対象敷地（候補地）の実測調査

再建の対象とする候補地を２箇所選び、敷地の地形やアプローチ等の現況調査を行ないました。前回４月と違って、今回は雨季が終わって間もないので棘のあるブッシュに悩まされました。これらの敷地図と状況写真はホームページに掲載しますので、詳細はそちらをご覧下さい。

●対象敷地①

- 集落の一番奥、地形も高いエリアで、ダウラギリ頂上が一番良く見える南斜面の上に位置する。
- 利用できる敷地の広さは約600㎡であるが、そのうち2／5程度は南斜面を含む。
- アプローチは北側の階段からで、東側は既存民家（2階建て）に接し、西側は小さなゴンパ（お堂）を持つ小広場に面している。
- 村のメイン通路から一皮外れた敷地で、地形的にも周辺よりやや高いので独立性のある敷地と言えよう。
- 敷地内は小さな倉庫が残っているが、旧家屋は殆ど崩れ、僅かに西面の壁の一部が残っているのみである。

●対象敷地②

- 集落の中間よりやや後方エリアで、メイン通路に面した敷地なので大変判りやすい場所にある。
- 東より西側に向かう道なりに高くなる敷地で、建物の前面に三角形状の空き地がある。建物は2階建てで、天井、壁の１／３位が崩れているが、隣接する南側は使用されている。
- 屋根や壁の崩壊は、前回4月時点よりも相当、進んでいた。

対象敷地①

対象敷地②